



Title	Interface humanities 01
Author(s)	
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/12950
rights	(c) 大阪大学21世紀COEプログラム インターフェイス の人文科学 / Interface Humanities
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Interface Humanities

01

冒険・きしみあう知

Contents

- | | | | |
|----|---|----|--|
| 2 | 冒険・きしみあう知
鷺田清一 | 2 | An Adventure: Colliding the knowledges
Kiyokazu WASHIDA |
| 6 | 創刊特集1 座談会 人文学の知は越境する
鷺田清一 小泉潤二 アンドリュー・ガーストル | 6 | Transboundary of Humanities knowledge
A. Gerstle / J. Koizumi / K. Washida |
| 14 | 創刊特集2 研究グループプロフィール
Interface | 14 | Profiles of Research Teams |
| 22 | 海外衛星映像配信システム
前迫孝憲 | 22 | Image Delivering System via Satelite Communication
Takanori MAESAKO |
| 24 | 人文学におけるデジタル・メディアの本格的利用にむけて
園府寺司 | 24 | Use of Degital Mediums in Humanities
Tsukasa KÔDERA |
| 26 | いま
現代を測る
女性センターで働くということ
成定洋子 | 26 | Working in Women's Center
Yoko NARISADA |
| 28 | フィールドのざわめき
画面にうつらないアフガニスタン
景平義文 | 28 | Afghanistan out of screen
Yoshifumi KAGEHIRA |
| 30 | 人文学のフロンティア
うなる身体／うけとめる身体 ―浪花節の聴衆をもとめて―
真鍋昌賢 | 30 | Body narrated / Body perceived.
The audience of Naniwa-bushi in popular cultural scene in Japan
Masayoshi MANABE |
| 32 | 編集後記 | 32 | Editorial Note |

いま、社会はなぜ

人文学の視点を必要としているか

#イメージ

としての「専門知識」

それと「官」と「民」の政治

「官」と「民」の政治

イメージとしての「日本文化」

たとえ、生命技術の高度化

こでも専門家の「専門知識」

ボランティアや市民の「専門知識」

シルクロードと世界史

市民の「専門知識」

うに表現して、市民の「専門知識」

生の現況、市民の「専門知識」

また、市民の「専門知識」

きています。市民の「専門知識」

芸術、文学、文化科芸術技術領域の現況

また、市民の「専門知識」

して、市民の「専門知識」

える、市民の「専門知識」

一般の市民の「専門知識」

映像人文学

結合される日本

ヨーロッパ覇権以後の世界の「近代化」

こうして、市民の「専門知識」

わたしたちの「専門知識」

現代社会の「専門知識」

「専門知識」

異なる「専門知識」

です。この「専門知識」

ディテクティブ・ミステリー

交際する世界を、市民の「専門知識」

第三、市民の「専門知識」

わたしが「専門知識」

緑化、市民の「専門知識」

ナショナルまたグローバルな「専門知識」

わたしの「専門知識」

ポピュラー・カルチャーの「専門知識」

わたしたちの「専門知識」

ナショナルまたグローバルな「専門知識」

また、それぞれの国家の「専門知識」

わたしたちの「専門知識」

臨床と対話

「いのち」について考えるとき

意外におもわれる、市民の「専門知識」

接触し、摩擦や軋轢を生み出す

りわけ住民や物品、情報技術の「専門知識」

マジョリティ

接触し、摩擦や軋轢を生み出す

わたしの「専門知識」

過去にユーラシア大陸の「専門知識」

「いのち」について考えるとき

人類の歴史をその流れの中で

わたしたちの「専門知識」

臨床と対話

科学技術に関する「専門知識」

害の対峙を、市民の「専門知識」

世代間、ジュンター間

対話「いのち」について考えるとき

摩擦や軋轢を生み出す

市は「いのち」について考えるとき

もはやかつての「専門知識」

たとは、生命技術の高度化

言語の接触と混交

すでにローカルに動き出す

たとは、生命技術の高度化

「哲学カフェ」

「ソクラテス・ダイアローグ」

わたしたちの「専門知識」

国家や地域の「専門知識」

文化を固定の相として

環境危機、生命技術

「ひとつ」の「専門知識」

「いのち」について考えるとき

NGOやビジネスにおける「専門知識」

トランスナショナルシティ

街はこの「専門知識」

うに表現しています。市民の「専門知識」

生の現況、市民の「専門知識」

高度に専門化している専門知識

な知識や技能を、市民の「専門知識」

では的確な判断を、市民の「専門知識」

コミュニケーションを、市民の「専門知識」

コミュニケーションを、市民の「専門知識」

コミュニケーションを、市民の「専門知識」

コミュニケーションを、市民の「専門知識」

コミュニケーションを、市民の「専門知識」

コミュニケーションを、市民の「専門知識」

コミュニケーションを、市民の「専門知識」

コミュニケーションを、市民の「専門知識」

コミュニケーションを、市民の「専門知識」

コミュニケーションを、市民の「専門知識」

コミュニケーションを、市民の「専門知識」

コミュニケーションを、市民の「専門知識」

コミュニケーションを、市民の「専門知識」

Interface Humanities

冒険・さしみあう知

プロジェクトリーダー

鷺田清一

インターフェイスの人文学？

《インターフェイスの人文学》。この言葉にふれて、「？」と首をかしげる方はきっと多いでしょう。インターフェイスは技術系の言葉ではないか、人文学でてそういうえば昔聞いたような気がするけれど、人文科学とどこが違うのだろうか……と。

「インターフェイス」というのは、異質なものがたがいにその界面（＝顔）をふれあわせる出来事、あるいはその場面のことです。これに對して「人文学」は、文系と理系、人文科学と社会科学がいまのように画然と区別される以前、いやそもそも科学と教養が「専門」という一線で区別される以前の、歴史や芸術、思想や慣習など文化のさまざまなありようについて、あらゆる権威から自由に問い、究める作法を意味していました。

そのような新奇な語と古色蒼然たる語を組み合わせて、わたしたちはいったい何をはじめようとしているのか。それについて、まづご説明いたします。

かし現在のところ、あまりにも急速に進化するその技術とそれがひきおこす事態に、ルールや手続きへの問いとかたちで、後追いの、あるいは防波堤として、対処しているにすぎません。わたしたちにいまも必要なのは、先端的な生命技術が開く未曾有の事態を前にして、その是非を正しく判断できる視点を手に入れるということです。そのためにとくに必要なのは、歴史と異文化をじっくり参照することです。なぜなら、わたしたちは自由に考えているようで、じつはひとつの時代に支配的な考え方に囚われていることが多いからです。狭い洞窟のなかでわいわい議論していることが多いからです。

「いのち」について考えるとき、たとえば過去のさまざまな時代に「いのち」がどのようにいたにせつに、あるいはどんなに扱われてきたかを知らなくてはなりません。別の地域では「いのち」がどう理解されているかを知らなくてはなりません。「いのち」の歎びと苦しみ、絵や音楽や舞踊や文芸のかたちでどのように表現されてきたかも知らなくてはなりません。誕生や育児や看病や介護や葬送の習俗が、どのような「いのち」の思想をもとに組み立てられていたかを知らなくてはなりません。これらは、歴史学や民俗学の、社会学や人類学の、美学や文学の、哲学や宗教学の仕事です。つまり、人文・社会科学の仕事です。そういう過去の「いのち」の習俗、他の文化の「いのち」の知を検証するなかではじめて、わたしたちは現在の生命技術の可能性と問題性とを正確に見究めることができるようになるのです。

いま、社会はなぜ 人文学の視点を必要としているか

環境危機、生命操作、医療過誤、介護問題、食品の安全、教育崩壊、家族とコミュニティの空洞化、性差別、マイノリティの権利、民族対立……。これら現代社会が抱え込んだ諸問題は、もはやかつてのように政治・経済レベルだけで対応できることがらではありません。また特定の地域や国家に限定して処理しうる問題でもありません。これらの問題は小手先の制度改革で解決できるものではなく、環境、生命、病、老い、食、教育、家族、性、障害、民族についてのわたしたちのこれまでの考え方（フィロソフィー）そのものをその根もとから洗いなおすことを迫るものです。いいかえまして、わたしたちの社会と文化のもとも基本的な私たち、それがいまあらためて問いただされているということです。たとえば、生命技術ひとつとっても、再生医療などそこから開ける技術的な可能性とともに、そもそも生命を操作するというのがどこまで許されるのか、許される部分があるとしても、そのとき「いのちの尊厳」や安全を確保するためにどのような策が講じられねばならないかが、問われねばなりません。これは生命倫理とよばれる議論ですが、それはし

人文学の精神

現代の人文・社会科学は、これらの問題をめぐっても、それぞれの領域でものごく精密な分析を重ねてきました。なのにそれが、現代社会が抱え込んだ困難な問題にうまく発言できていないのはどうしてなのでしょう。それは、現代の学問研究がいわゆる縦割りの制度のなかに陥没しているからです。たとえば、哲学の合理的な推論と歴史学の実証的な知識とが遊離しています。英国史、アジア史、アフリカ史というふうに、あるいは仏文学、国文学、インド文学というふうに、研究が地域や言語圏によって分断されているからです。人文・社会科学はこうした陥没から抜け出て、歴史を、あるいは異なる文化のあいだを、自由に行き来しながら、ときに方法にさえ囚われず、ただことがらにのみ従うような視点を紡ぎだしていかなければなりません。かつて教会の権威にも権力者の権威にも屈せずに思考の自由を謳った《人文学》のように。

そう、《人文学》とは精密で深い教養のことなのです。人文・社会科学者のみならず自然科学者すらもが、その知的いとなみの底に湛えていなければならない教養のことなのです。別の言葉でいえば、過去の人びと、他の地域の人びとのほうから自分を見ることのできる、そういう感受性をもった知のことなのです。そして、《インターフェイス》の視点は、その延長線上に浮上してきます。

インターフェイスの視点

意外におもわれるかもしれませんが、「ひとつ」の文化などというものはありません。「ひとつ」の文化といわれるものは、さまざまな契機が折り重なりあい、かたちもさだかではない複数の流動的な文化が接触し、摩擦や軋轢を生みだしながらたがいに深く越境し、侵蝕しあうなかで複雑に生成してきたものですし、またさらに別のものへと生成していきます。文化はいつもそのような錯綜のなかにあり、とりわけ住民や物品、情報の移動が一気に加速した現代のような時代には、文化を考えるにも、こうした複数のものの錯綜、つまりは《インターフェイス》の視点を欠けば、ほとんど何も見えてきません。

また、それぞれの国家や地域の内部でも、民族間、マジョリティとマイノリティ、「官」と「民」、専門家と一般市民のあいだ、さらには世代間、ジェンダー間で、さまざまな文化摩擦や軋轢が顕在化してきています。そして、それらのどちら側にも「正義」があるかというよりも、むしろそれらの差異や対立を生みだしている場の構造そのもののほうに問題はあります。先の科学技術に限ってもそれはいえるので、科学技術は一方で、市民の生活の隅々にまで多くの利益と恩恵をもたらすと同時に、人びとに大きなリスクを背負わせてきました。当の科学技術が現代では高度に専門化しているがために、一般の市民にはその意義も危険も捉えがたいものになっています。他方、専門家のほうは、専門領域ではきわめて高度な知識や技能をもつてはいても、専門以外のことがらについては一般の市民となじく素人といつてよいので、彼らもまたそれをもつ社会的影響については的確な判断を下せません。専門家も非専門家もいずれも、科学技術全体のあり方を見渡せないということ

に、高度化した現代の科学技術の問題があります。ここでも専門家と非専門家の《インターフェイス》の構造が問題化しているのです。

《横断的な知》と《臨床的な知》

この二相は、言ってみればわたしたちの問題とする《インターフェイス》の水平軸と垂直軸にあたります。そしてその二つの軸に沿った《人文学》の探求を、《横断的な知》と《臨床的な知》というふうに表現しています。《横断的な知》というのは、異なる複数文化のあいだの接触や交叉や軋轢を国家・地域横断的にとらえてゆくもので、《臨床的な知》とは、文化の諸次元、とりわけ研究者と問題発生現場、専門家と一般市民とを架橋してゆくものです。このような二つの知を核とするものへと現在の人文・社会科学を構造変換し、水平・垂直それぞれの軸において、複数文化の錯綜のなかで発生するさまざまな社会問題にアクチュアルに対応できる新しい21世紀型の《人文学》をデザインすること、それをこのプログラムは狙っております。このプログラムでは、《インターフェイス》という現象をめぐって、六つのモデル研究を設定しています。

《横断的な知》のモデル研究としては、ひとつは「交錯する世界」と銘打って、過去にユーラシアの中央で起こったもつとも大規模な《インターフェイス》の現象である①「シルクロード」の歴史を対象とします。これはやがて「海のシルクロード」と呼ばれるユーラシア大陸南の海洋文化の生成へと膨らんでいきます。これらの研究は、インターフェイスという相から世界史の記述そのものを刷新しようという大きな野心をもち、高校での歴史教育にも積極的にコミットしていきます。そこから

さらに眼を現代のただなかに移して、②「トランスナショナル・ティ研究」グループが、現代の環太平洋世界での広域的な地域ネットワークの複雑な生成過程を構造的に分析します。難民・移民排斥、民族紛争という現代政治の問題からNGOやビジネスにおけるトランスナショナルネットワーク形成まで、グローバル化する現代世界が内蔵するもつともアクチュアルな問題が、とりわけここでは相互摩擦やデイスコミュニケーション・

シヨンに定位して分析されます。

つぎに、「縫合される日本」というタイトルで、③イメージとしての「日本文化」の変容や、④国内外での日本語の動的变化を観察しながら、日本を軸とする東アジアの諸文化の横断と越境の過程を分析します。アニメやゲームなどのポピュラーカルチャーから「記憶の政治」まで、現代日本文化をめぐる鋭角的な分析をしてきた研究者たちと、東アジアの若手研究者との共同作業に大いに期待しています。

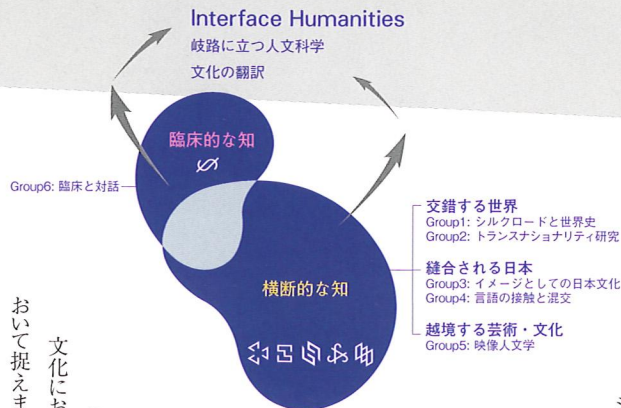
第三に、「越境する芸術・文化」では、芸術、文学、文化における越境的現象をそのモビリティ（動態）において捉えます。たんに越境現象の研究だけではなく、研究領域やアカデミズムの枠を越え、他機関とも連携し、研究者自身も越境し変貌しようという試みです。初年度は⑤「映像人文学」と題して、ベトナムの無形文化財の映像記

録化、宝塚で活動した作曲家ラスカの作品蘇演、国際デザイン史フォーラム「画像と文字」で始動しました。「アジアにおける近代演劇」「中欧・東欧の芸術・文化」なども計画中です。また、COE全グループ共通の企画としてメディア教育画像データベースの構築などもスタートします。

《臨床的な知》のモデル研究としては、⑥「臨床と対話」グループが、多元化する現代社会のなかで、専門家と一般市民、マジョリティとマイノリティ、ジェンダー、世代間など、異なるコミュニケーション文化圏に属する集団がインタラクティブに理解しあい、議論する新たなコミュニケーションの形態を模索します。裁判外紛争処理の方法論から哲学的討議の技法論、コンセンサス会議やサイエンス・ショップ（ゴミ処理や食の安全など市民生活のなかに発生している科学技術上の問題に、市民の要請に応じて大学がそのプロジェクトを組みつつ対応する仕組み）の構想など、現代社会が必要とする専門家と非専門家をつなぐ新しいコミュニケーションの形式がさまざまに模索されます。

そして最後に、これら六グループの主軸メンバーが「岐路に立つ人文学」と「文化の翻訳」という二つのテーマで、それぞれのモデル研究の成果をすり合わせて、そこから《インターフェイスの人文学》というかたちで、21世紀の新しい人文学のあり方を提案します。

大阪大学の人文学研究の大きな飛躍に、どうかご注目いただきたいとおもいます。



座談会

人文学の知は越境する

鷲田清一
(臨床哲学)

×

小泉潤二
(人類学)

×

アンドリュー・ガーストル
(日本文学)



いよいよ大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」がスタートしました。文学研究科と人間科学研究科、さらに言語文化研究科を横断する、大きなプロジェクトです。すでに、さまざまなシンポジウムや研究会、セミナー、ワークショップなどが開催されています。このたび、アンドリュー・ガーストル教授をゲストにお招きし、鷲田清一教授と小泉潤二教授をまじえて、人文学におけるプロジェクト研究の重要性と課題、また「インターフェイスの人文学」の可能性について語っていただきました。

異質なものの遭遇

鷲田 哲学者「チエは、自分の著作に『悦ばしき知識』という表題をつけたことがありました。また、日本語には、目からうろこが落ちる」という表現があったりします。つまり、知ること、あるいは学問することには、世界や他者をみる視線のチャンネルを根本から変えるほどの楽しさがありますよね。取り扱うテーマはシリアスでも、学問する、研究すること自体はワクワクさせるものがある。今日の座談会では、そういった研究の楽しさ、面白さ、スリルについて、具体的にお話しできればと思います。

今回の三人にはある共通項があります。まず、ガーストル先生のご専門は日本近世演劇、ご出身はアメリカで、現在はロンドン大学で教鞭をとっておられます。小泉先生はアメリカで勉強されて、ラテンアメリカを主なフィールドとした文化人類学研究をされている。私はヨーロッパの近現代の思想が専門です。それぞれ、自分が育った文化とは全然違う異文化の研究をしていることが共通項です。私たちのプログラムのテーマである「インターフェイス」には多義的な意味がこめられていて、「複数文化の接点」もそのひとつです。その意味では三人とも、まさにインターフェイスに立って研究してきたと言えると思うのですが、それぞれ

が現在の研究することになったきっかけからお話ししましょうか。

ガーストル 私は大学一年生の時に、たまたま上智大学に行くプログラムに参加したことが大きなきっかけです。それまで日本にはまったく興味がなかったのですが、一九七〇年の八月末に日本に来て、日本語や日本文化について学びはじめました。その年の十一月、大学から徒歩十分の市谷の自衛隊で三島由紀夫が割腹自決し、鮮烈な異文化体験することになったのです。この経験がなければ、おそらく研究者にはならなかったと思います。異文化との接触によって、自分自身や自国の文化を見つめなおすきっかけになった。その後、コロンビア大学のドナルド・キーン先生の研究室で今の研究につながる近松の「悲劇」に惹かれていきました。



ドナルド・キーン先生とともに



小泉潤二 (こいずみ・じゅんじ)

1948年生まれ。東京大学大学院社会学研究科で修士号、スタンフォード大学で博士号(人類学)を取得。アルバータ大学、新潟大学などを経て、大阪大学大学院人間科学研究科教授。プリンストン高等研究所ハンズマン招聘研究員(1996-97)。編訳書にC・ギアツ『解釈人類学と反=反相対主義』(みすず書房)、『ヌガラー19世紀バリの劇場国家』(みすず書房)。編著書にDynamics of Cultures and Systems in the Pacific Rim: Anthropological Studies (Osaka Univ. Press)など。

ガーストル いまのお話は、とても大切な議論ですね。アメリカやヨーロッパ、日本でもそうだと思いますが、現在の大学院の教育は理論の部分が大きくなってきている。若者はグラントセオリーにある種の格好良さを感じますから、特にそういった傾向が強くなるのかも

ていくという意味でのインターフェイス。同時に、人文科学、社会科学、一部は理系にもまたがった、学問領域の境界上にあるという意味でもインターフェイスです。また、人類学は事例研究を基礎としますので、現場に即した立場、つまりクリニカル(臨床的)な立場で研究する。インタビューや観察を通して、現地の人との相互作用の中で成果が生まれるということが根本にある。つまり学問の中にインターフェイス概念が組み込まれているのです。今回のプログラムの中で、「トランスナショナル・リテイ研究」というグループを立ち上げましたが、その根底にあるのは「現代に何が起こり、何が進行しているかを知りたい」という動機です。たとえば私の場合、中米グアテマラ北西部の農村地域を主なフィールドとして一九七〇年代の半ばから断続的に調査に入ってきました。この四半世紀以上の間にその地域がどう変化したかを定点観測することによって、現代に起っているアクチュアルな問題が見えてくる。それは、私が研究を続ける中でワクワクしてきた部分とつながっているのです。



四半世紀前からの私の友人は若くして亡くなった。その息子はメキシコを越えてアメリカに渡り、2年ほどのビザなし就労の後、村に戻った。グアテマラ北西部農村の小さな店で。

しれない。しかし大切なのは、実際の世界に深く詳しくふれることです。そうかといってたとえば文学であれば、地道に文献にあたっているのは結局、文献学に戻ってしましますから、理論が必要なのかもしれません。一番いいのは、ケーススタディから理論が出てくることですね。インターフェイスの人文科学というプロジェクトでは、一方で理論的枠組をもつて研究し、他方で事例的なものにふれて自分で消化する。それが、身につけた理論的枠組に影響を与え、相互作用を生んでいくことを考えておられると思います。そういうとき、バランスがとても重要だということを感じました。



Andrew Gerstle
(アンドリュー・ガーストル)

1951年生まれ。早稲田大学で修士号、ハーバード大学で博士号を取得。オーストラリア国立大学を経て、ロンドン大学教授。同大学アジア・アフリカ比較文学センター所長。著書に、Circles of Fantasy: Convention in the Plays of Chikamatsu (Harvard 1986, paperback 1998), Eighteenth Century Japan: Culture and Society (Ed.) (Allen and Unwin 1989, second edition 2000)など。

一九七〇年代末に就職の時期を迎えますが、当時、日本学はブームになる前で、大学の教職のポジションはなく、またアメリカが不景気だったので、一時は一般企業への就職も考えました。たまたまオーストラリア国立大学に就職しましたが、同じ英語圏であっても、そこでも異文化を感じました。それと同時に、私の日本にたいする視野も変わってきました。というのも、オーストラリアでは東南アジアを通して日本を見るのです。その後、十年前にロンドンに移りましたが、ヨーロッパから見た日本もまたアメリカやオーストラリアとは違っていたのです。

類学をやることになるとは思っていませんでした。大学では法学部に進学するコースに入学しましたが、もともと西洋古典音楽が好きで、西洋音楽にのめりこんでいました。ところが、西洋音楽にのめりこめばのめりこむほど、違和感が出てくるようになった。思い返せば、それが最初の異文化体験だったかもしれません。もうひとつはレヴィ・ストロースの研究との出会いです。今はレヴィ・ストロースにたいして批判的なスタンスだけれど、当時は非常に刺激を受けて、文化人類学に専門を変えました。その後はいろんな偶然が重なります。学部生時代にメキシコ留学の機会を得て、強烈な異文化体験をし、大学院に進んでアメリカに留学し、今のラテンアメリカ研究につながっています。

小泉 ガーストル先生同様、私も最初は人

類学をやることになるとは思っていません



鷺田清一（わしだ・きよかず）

1949年生まれ。京都大学大学院博士課程修了。関西大学などを経て大阪大学大学院文学研究科教授。著書に『モードの迷宮』（ちくま学芸文庫、サントリー学芸賞受賞）、『「聴く」ことの力』（TBSブリタニカ、桑原武夫学芸賞受賞）、『悲鳴をあげる身体』（PHP新書）、『メルロ＝ポンティ―可逆性』（講談社）など。



【marie claire】での連載が一冊にまとまった『モードの迷宮』（中央公論社 1989年 / ちくま学芸文庫 筑摩書房 1996年）

身近な世界との境界

鷺田 お二人とも研究の道には偶然に進まれたようですが、私の場合はすべてが正反対でした。高校時代から思想が好きで、「自分の生きているこの世界を知りたい」という強い思いから思想に飛びついて、大学では哲学を専攻しました。まさに、ガーストル先生がおっしゃった、グランドセオリーに飛びついた若者のひとりです（笑）。

哲学は具体的な事例ではなく原則、法則、原理を追求する学問ですから、具体的事例はそういった原理や法則の一例としてしか見ない。私は普遍を求める哲学として現象学を学び、学生のころはフッサールの文献学に浸っていました。テキストだけでは飽きたらず、ドイツに行つて彼の手書き原稿なども調べました。とてもスリリングで面白かったですね。

期から、日本で、日本語で哲学の営みをできないかと考えはじめた。その頃から私の人生がゴロツと変わってきます。

第一段階がファッション雑誌『marie claire』（中央公論社）ではじめたファッション論です。その中で私は哲学の翻訳語を一切使わずに衣服を哲学的に考えることを試みました。哲学とは、それなしでは生きていけないものについて考えることです。服を着ない人や散髪に行かない人はいませんか、ファッション論はまさに私がやろうとしていたことと一致しました。ものすごく大変でしたが、日本で、日本語で哲学の営みをする良い訓練になりました。

第二段階が「臨床哲学」です。社会的、文化的な問題が起こっている現場に哲学者が足を運んで、そこで実際に使われている言葉を使って、その問題をフィロソフィカルに考え、表現するダイアローグの哲学をしようという活動を、研究室レベルではじめています。デザイン印刷ではなく、事例にとどまらず、そこから哲学を立ち上げるという、哲学の一種のフィールドワークです。たとえば、いまは看護や介護、教育の現場に行っているのですが、その人たちが抱えている問題は、哲学が考えてきたテーマと似ているんですね。たとえば看護や介護の現場の人たちは「生きていること、死ぬことの意味」「苦しみ」を考え、小学校の先生であれば「世界のすべて」について子供た

ガーストル 偶然ではないというよりも、鷺田先生は真面目だったんですよ。

鷺田 いえいえ、それが後にとんでもない方向に進みます。文献学でマニアックな喜びに浸る一方で、ドイツに行つた頃から奇妙な違和感が出始めた。どういうことかという、ヨーロッパの思想について学んでも、私は日本人です。ドイツで鈴木大拙について発表させられたこともある。つまりヨーロッパでは日本人の顔をせざるをえない。ところが、日本に帰るとヨーロッパの思想の専門家としてヨーロッパの顔をしなければならぬという、その二つがさへに居心地の悪さを感じ始めたのです。その違和感の理由をつきつめて考えると「言語」の問題だったのです。ヨーロッパの哲学とは本来、日常使っている言葉に磨きをかけ、つぎつめるものです。ヘーゲルなどの原書を見

れば分かりますが、すべての言葉が子どもでも使っているような平易な言葉で書かれている。

それが日本語に翻訳されるさいには、正確さを求めるあまり、「ある」を「存在」と訳すなど、普段使わない言葉や造語が多く用いられたんですね。そういう意味では、日本ではヨーロッパでいう「哲学の営み」をまったくやっていない。むしろ、どんどん離れて行つてしまつたのです。それが私の中でも顕在化してきて、哲学の用語で話す日常生活と、それとは無関係の言葉で話す日常生活という二つのカルチャーが高校時代から自分の中に平然とあったことになり、違和感として噴出したんですね。

小泉 ご自身の中に複数文化を抱え込んでしまつてたということですね。

鷺田 その通りです。もちろん、いまも現象学の研究を続けていますが、他方ではある時

ちと考えていかなければならない。まさに古来からの哲学のテーマとオーバーラップします。そういった中から市民が生きていくための武器になるような知を生み出していくことを、臨床哲学では目指しています。

つまりプリンシプルからスタートした私の研究生生活は、お二人が最初から立っていたインターフェイスの領域にようやくたどり着いた。いわば新参者ですね（笑）。

ガーストル いまのお話の中には、私がコミュニケーションの問題として考えていることと同じ問題があります。たとえば文学にしても、本来、文学はど普遍的なものはないはずなのに、大学でやっている文学研究となると、普通の人が読んでもまったく理解できなくなつてきている。それに加えて、このようにCOEのような研究プログラムを立ち上げると、ドイツ哲学が日本に紹介されたときのように、新語や造語を逆にくさん生み出してしまふことにもなりかねないので、そこは注意しなければならぬと思いますね。

プロジェクト研究の知

ガーストル ところで今回のお阪大学の「インターフェイスの人文学」プログラムは、京都大学の人文科学研究所や国際日本文化研究センター（日文研）、あるいは国立民族学博

物館（民博）の活動に近い部分もあるように思うのですが、違いはどこにあるのでしょうか。
鷺田 私たちの場合、文学、哲学、歴史などの研究者を育てるというディシプリンの部分とインターディシiplinaryな、つまり学際的な動きの両方を抱えているということがあげられます。その両者の緊張感やプレッシャーは、たいへん大きい。

ガーストル ロンドンにも日本のCOEのように数年単位で共同研究を推進するプログラムがあり、私たちも四年前に研究プロジェクトをスタートさせました。文学論、文化論のこの四〇年間を問う試みで、「文学とパフォーマン」という大きなテーマを立てて共同研究を行っています。その中で、通常の文学研究の領域では、いっしょに研究しないような研究者と連携をはかるようにしました。とりわけ、文学は言語の上に成り立っているのに、アフリカや中近東、南アジアを専門にしている文学研究者とはほとんど交流がない。そこで私たちのプロジェクトでは、たとえば人類学や美術等の研究者、文学でもアジア、アフリカなど、研究があまり盛んではない地域の文学の研究者が同じテーマのもとに集まり、共通の知を作りだそうとしています。もちろん、大変なことですが、互いにたくさんの刺激を受けました。個人的な経験をお話しますと、中世ヨーロッパの専門家との共同研究を通じて、写本や絵

は再現することを目的に書き残されたのではなく、オーラルな世界を「記憶」として残すためのものである。また、パフォーミングはたんなる再現に終わるものではなく、その刺激を受けて、さらに新しい芸術が生みだされていく、という新たな認識を得ました。これは、今後の私の研究に大きな影響を与えることになるでしょう。

小泉 私たちの研究グループでも、これまであまり交流がなかった分野の研究者のあいだで、「トランスナショナル」という共通のテーマのもとで連携していくことを、とくに重視したいと考えているところです。

鷺田 さきほどの民博や日文研との違いでもお話ししましたが、そういった研究機関には、新しいテーマにあわせて研究組織や体制をどんどん変えていくフットワークの軽やかさがあります。しかし大学の場合、研究組織そのものが学科編成として制度化されています。そうすると、たとえばラテン語やギリシア語などの語学からはじめ、そのうえでさらに研究分野に関する基本的な訓練をしなければならぬ。そうしたディシプリンと、学際的な研究テーマとの両立が難しい。そのバランスを考えた時に、組織的にどのようなかたちを設定するかが難しいところです。先生のプロジェクトではどのようにされていますか。

ガーストル 私たちのところでは、大学院生

も研究会に参加させて、発表させるようにしています。直接的な教育ではないけれど、それぞれの学生の勉強になっているという実感があります。うまくいけば、彼らの研究を何かのかたちで出版させることも考えている。

鷺田 私たちのプログラムでは人文学の再編成を視野に入れているけれど、それが制度化すると、また別の新しいディシプリンの問題を発生させかねない。そこをよく考えないといけないと思うのですが、小泉先生はそのあたりをどのようにお考えですか。

小泉 私は、制度化と学問のディシプリンはもうすこし、分けて考えられると思っています。従来のディシプリンに基づく制度の下でも、十分に新しい研究はできると思います。ですから今回のようなプログラムでも、学問としてのプログラムの部分と、それを制度化し固定して大学の中に組み込む部分とがあってもいいでしょう。あんがいディシプリンは柔らかく動きうるもので、それを支え固めるのが制度的基盤なのではないでしょうか。

ガーストル 制度そのものの影響はあると思うけれど、在籍している大学院生を今回のプログラムに参加させて、機会を与えることが必要ですね。従来のディシプリンを身につけさせると同時に、いろいろな意味でのインターフェイスに立たせ、自然に刺激を受けるチャンスを与えると、新しいものが生まれてくる。

うと考えておられますか。

鷺田 六つの研究グループそれぞれによってターゲットは若干異なると思いますが、広く市民に向けて成果を出していきたいですね。それには出版というかたちも考えていますし、展示会についても検討しています。

ガーストル 私たちが今ぶつかっている壁は、大学の出版会でも論文集の出版を引き受けてくれないということです。出版費も予算化していません。

もうひとつ、予算に関して失敗したと思っていることは、研究者が研究に専念できるシステムを予算化しておかなかったことです。共同研究にはかなりの時間と労力が必要なので、研究グループのリーダーが研究に専念している期間は授業を免除し、その間、別の人がその部分を補えるような予算の組み方ができれば良かったと後悔しています。

日本の国立大学も競争の時代に入り、その中で生き残っていくには、細かいところまで考えていかなければいけない。それぞれの先生が力を発揮できるシステムが必要だし、なによりも成果が求められる。COEはそういった意味で大きなチャンスです。人文学の分野で、

鷺田 学問は何かを知りたいからやるわけで、私はその「知り方」という方法について意識しない学問なんてありえないと思っています。しかし他方では、ディシプリンを重要視しすぎたがゆえに、人文学が制度化する中で、かならずしも必要でないことにも余計なエネルギーを使ってきた部分が結果的に出てきている。

たとえば、日本で哲学史として習っていることは、ドイツで一九世紀に作られた哲学史なんですね。それがいまでも哲学史のスタンダードとされている。そのため、本来はその背景にあつたたくさん重要な思想を読む人がいなくなってきたという現状もあるのです。インターフェイスの人文学では異なる文化、異なる学問と接触することの大切さと同時に、自分がアイデンティファイしてきた学問の歴史性を検証することも重要です。

「インターフェイスの人文学」が目指すもの

ガーストル さきほど、私が日本文学研究に進んだのは偶然だったというお話をしました。ふりかえてみれば、そこにチャンスを支える制度があつたということも大きかったのです。今回の大阪大学の「インターフェイスの人文学」プログラムでは、たとえば留学制度などもプランに盛り込まれているのですか。

すぐに大きな理論的成果を生むことは難しいと思いますから、まずは「インターフェイス」という共通の基盤作りを目指していただきたい。

鷺田 最終的には人と人とのインターフェイスが重要だと考えています。それは、ひとつの共同体に属する、いわばゆりかご的な安心感から脱していくためのインターフェイスでもあります。

小泉 語彙を共有しコミュニケーションを可能にして、ある学問分野を発展させていくためには共同体が必要ですから、共同体それじたいを否定する必要はないけれど、それを固定化し、権威化してはならないということです。

鷺田 同一のものを共有する共同体ではない、新しい共同体を模索することなのです。

ガーストル そのためには、誰もが研究に参加できるためのデータベースをしっかりとつくることも重要になってくると思います。

鷺田 ガーストル先生のお話は、私たちのプログラムのとても良い参考になると思います。本日はありがとうございました。

二〇〇三年一月十四日(火) 千里阪急ホテルにて収録